

清貧の生きかた

中野孝次 編



清貧の生きかた

中野孝次 編

筑摩書房

清貧の生きかた

一九九三年八月二十日 初版第一刷発行

著 者 中野孝次

発行者 森本政彦

発行所 筑摩書房

〒一一一 東京都台東区蔵前二一六―四
振替 東京六―四一二三

印刷 明和印刷

製 本 和田製本

©中野孝次ほか 1993 Printed in Japan

ISBN 4-480-84229-2 C0010

※注文・お問い合わせ、及び乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
大宮市榎引町二一六〇四 筑摩書房サービスセンター
〒三三三― TEL 048-651-0053

「はころの本」シンボルマーク 五郎丸正信



もくじ

清貧の生きかたとはどういうものか

I 内面への旅——俗を離れて

その先生の心田

真実の自己を求めて——捨——

清貧との出会い

II 自然との共生

森の世界

木のはなし

崩れ

自然の遊行者

五つの根

涙をたらした神

中野孝次

水上 勉

坂村真民

小崎登明

高橋延清

志村ふくみ

幸田 文

今西錦司

山尾三省

吉野せい

3

9

11

19

33

47

49

55

61

73

79

87

III 古典に学ぶ——清貧の系譜

本阿弥行状記

空中齋光甫

101

方丈記

鴨 長明

111

徒然草

吉田兼好

119

良寛禅師奇話

解良栄重

129

IV 清貧に生きる

ゼイタク論

三木 卓

135

酒屋へ三里、豆腐屋へ二里

安岡章太郎

145

貧乏論

鈴木大拙

161

失われた時を求めて

中村達也

177

清貧の生きかた

清貧の生きかたとはどういうものか

中野孝次

わたしの書いた『清貧の思想』という本は、思いもかけず世に迎えられ、そのためわたしはいろいろとんだ災難を蒙ったが、その災難の一つにろくに読みもしないでする非難があつた。経済学者から文芸評論家まで何人もが猛烈な批判の言葉を浴びせたが、みなとんだ見当外れの批判ばかりで、はたしてこの連中はあの本を本当に読んだのだろうかと思われるものばかりであつた。

つまりかれらは全部『清貧の思想』をたんなる貧乏礼讃とか貧乏へのすすめとつて、その内容はまったく理解していないのであつた。わたしは外国で清貧の話をするとき、まず「清貧」という言葉について、「自由でゆたかな内面生活をするために、あえて選んだシンプル・ライフ」と訳すことにしていたが、実際にその通りで、わた

しの言いたいこともそれに尽きるのである。物や金への執着と関心が強ければ強いほど内面生活のゆたかさは失われる。だから生活は能うかぎり簡素単純にして、心の世界を贅沢にしようではないか、と主張しているだけのことなのだ。その主張を非難者たちはぜんぜん読みとっていない、読みとる能力を欠いている連中ばかりが悪口を言っていたのである。

そこで今回筑摩書房がこちらの本のアンソロジーの一卷として「清貧の生きかた」というのを編みたいと言って来たのを幸いとし、わたしは、わたしの考えに共鳴する論をここに集めた。

それは第一には「内面への旅」である。物とか金の所有ばかりにかかずらっていないで、心の世界に目を向けようじゃないかと、ここにある三つの文章は言っている。

第二にそれは、欲得ばかりの社会を離れた「自然との共生」である。日本人は昔から自然を自己の対蹠物とは見ないで、自然の中で自然と共生し、そこに深いよろこびを感じて来た。ここに集めた六つの文章はとくにそのことをみごとに伝えている。

第三にそれは「古典に学ぶ」であって、この国の昔から優れた人たちが行なってきた生き方を知り、それが日本の文化の伝統にあったことに力づけられようとする。

第四にそれは具体的にどう「清貧に生きる」かの事例であって、四つの文章のどれもが目をどこに向けているかをみごとに示している。

これら四つの章を読めば、「清貧」とはたんに貧乏・自慢や貧乏礼讃でなく、現世での生き方は能うかぎりシンプルにして、情や心や感性やといった人間の内的能力をこそ最もいきいきと働かせる高雅な生活をしようじゃないか、という主張だとわかるはずである。それはつまり量の増大ではなく質を高めようという主張なのである。人間はいくら物や金を持つていてもそれだけでは決して尊敬されない。むしろ物や金にばかり関心を持つ人間は、世界からバカにされる、軽蔑されるのであって、人はどんな国にあっても品位というものをこそ尊敬して来たのだった。そのごくあたり前のことが、高度経済成長期からいわゆるバブル繁栄の時代に、日本人から忘れられていて、今になってようやく気がついたという次第なのであらう。

この本に集めた四章十七人の意見は、そういう生き方の事例を示していると言えると思う。たとえば第四章の中村達也の文章の中に、「舟唄」の作者は、

《この消費社会のあり余る財・サービスの一切を拒否することによって、むしろ、自分自身の「豊かな時間」を取り戻しているといった風なのである。》

と言っているが、実際にこの姿勢は他のすべての人の姿勢に通いあうと言っている。
 戦後四十数年、経済成長は、われわれに豊かな財・サービス（腕時計も！）を与える
 ことに成功したものの、豊かな時間を与えることには成功していない。子供達、青
 年達、働き盛りの大人達、そして高齢者が、果たしてライフサイクルのそれぞれの時
 期に、取り替えのきかない固有の自由で豊かな時間を享受できているだろうか。』
 この反省が底にあつて、その上でここに掲げた文章は、ではどうしたらその「取り
 替えのきかない固有の自由で豊かな時間」を創造しようかと考えているのである。

動かずに

黙って座っている、と

生きものたちが

心を開^あけてやってくる

仲間にならんか、と

高橋延清「どろ亀さん」のこの詩は、そういうゆたかな心の時の一つを描いている。

金儲けにあくせくと忙しく立ち働いてばかりいては絶対に知ることの出来ない状態だ。《湯豆腐にしろ、冷奴や胡瓜もみにしろ、明治時代は、味噌も醤油も野菜も、みんな混り気なしの本物ばかりだから、いま私たちが食べてゐるやうなものとは較べものにならないだらう。(略)》どうやら私たちは、物質の繁栄と引きかへに、荷風のいふ「氣候と風土の恵み」による食べものを失つたのであらうか。》

安岡章太郎のこの歎きも、生活というものはほんものあつてこそのものであつて、いくら経済的に繁栄しても本当の食いのものが失われたのでは、一体何の為に働いてゐるのかわからん、と言っているのだ。

こういう指摘によつてわれわれはようやく、「清貧」とはそういう紛いのないほんものによつてだけ成り立つ、簡素だが充実した生活、うわべだけではない内実のある本当の生活のことだとわかつてくる。合板材で出来た見てくればかりいい机や箱やテーブルではなく、無垢の板で作られている、つまり日本人が昔から大事に使い、形見わけして何代も伝えて来たような本当の品物で成り立つ生活。それは次から次へと開発されてわれわれの欲望を刺激しつづける電気製品やクルマやカメラのようにではなく、ほんものたしにかさによつて永続し、永続することであつてわれわれの生活の伴侶とな

る。季節を問わず供給されるビニールハウス栽培の胡瓜やトマトではなく、露地で作られた、農薬や化学肥料を使わぬ、ほんものの野菜。旬のものという言葉どおり季節季節にしかとれない野菜や魚。そういうものだけで成り立つ暮らしは、現代でおそらく最も贅沢な暮らしとっていいだろうが、「清貧」とはそういうほんものの生活を志しているものなのである。

わたしの「清貧の思想」に見当違いな批判を浴びせて来た連中は、このアンソロジーによつて清貧の思想とは何かを学ぶがいい。これはすべてわたしがあの本の中で言っていることどものヴァリエーションなのだ。言いかえれば、わたしはこういう文章から『清貧の思想』を学んだのであつて、清貧の思想とはこの国ではちつとも珍しいことではなく、それこそが昔からのこの国の文化の伝統をなして来ているのである。少しも変つた主張ではない。むしろわれわれの世代の者の誰が言いだしてもよく、誰でもが知っていることをわたしがたまたま言っただけのことで、あれは物珍しい主張でもなんでもなく、昔からこの国の人びとがみずから行なつて来たことばかりなのだ。そのことをこのアンソロジーを読む人は安心して知るに違いない。

I 内面への旅——俗を離れて

ここに集めた文章三編は全体の序曲として、清貧の心のありようとはどういうものかを語ったものばかりである。冒頭の水上勉の「その先生の心田」は、人間の心を田に見立て、田もまたつねに心して養わねばすぐに汚れることを説く。K先生のために黙々と山で美しい色の石を拾い、くだいて釉薬を作りつづける老人と、そういう人たちがあればこそ自分の作品があるのだと勲章を辞退するK先生と、ここにひびきあう美しい心こそ人間というに値する。金銭では買えない宝がそこにある。

第二編の坂村真民「真実の自己を求めて——捨——」は、欲望や野心や名誉心や金銭欲や、そういうものを捨てに捨てに捨て切ったところに光明充滿する世界が開けることを悟る。この人の一遍に対する傾倒は並大抵のものでなく、われわれ凡俗にはなかなかその真似は出来ないけれども、捨てきった果てに、

ああ山河草木

みなナムアミダブツをとなえ

日月の光のように遍満してゆくのだ

という世界の美しさは、思うだけでも氣持がいい。

今の日本は物が溢れ、飽食社会とか使い捨て社会といわれているが、われわれが知らず知らずのうちに陥っていたその状態こそ、滅びに到る道だったかもしれないのである。

小崎登明「清貧との出会い」は、いまの日本にもこういう人たちがいたと知るだけでもわれわれに清々しいものを与えてくれるようだ。コルベ神父を初めとする七人の神学生たちは、その昔の聖フランシスコの教えをそのまま信じ、その教えのとおりに生きた。そして八巻先生はまた聖フランシスコにひかれ、それゆえにこの七人の人々と共鳴するに到る。人間の心と心がひびき合うときいかに美しい音色を発するかを、この話は示している。八巻先生の感歎はまたわれわれのものでもある。

「コルベ神父の信頼に感嘆した。七百年前の聖フランシスコの精神が、まぎれもなく生きているではないか。聖フランシスコの厳しい清貧の生活を守るのは、とうてい現代人にとつては不可能だと思われたのに、いまここに私と同じ人間が、立派に果たしているではないか。それは決して歩み寄ることのできない高嶺の花ではなかった。」

人間というのはまことに心の持ちよう次第で、貪欲にも、またこの人達のように無欲にも、どちらにも成ることのできるものであった。この七人の人々は高貴と云っていい心の状態を保って生きた。品格というものが看過されてしまっている時代に、身を以て人間の品位とは何かを示してくれたのである。

その先生の心田

水上
勉

